# 芸振

大分県芸術文化振興会議

■発行人：挟間正年 ■編集人：小代基雍

（題字 首藤春草）

No.76（平成1号） 1.3


もくじ


ずいそう……1
特別企画 芸振、25周年を迎えて…2～4
芸術文化基金海外派遣事業帰国報告……5
さざ波……6
加盟団体の活動……7
シリーズ会員通信⑥ わたしは今……7
事務局だより……8


## うるおいとやすらぎの県都大分市をめざして


大分市長
佐藤益美

ものの豊かさをもたらした高度経済成長期から低成長期へと移行した今日、生活水準の向上、自由時間の増大と相まって、高度成長期にはともすれば忘れ去られがちであった心の豊かさを願って、県民の文化に対する関心は非常に高まってきた。そうした中で、県芸術文化振興会議が果たした役割は大きく、これまでのご努力に心から敬意を表する次第である。

さて、我が大分市でもうるおいとやすらぎが得られる魅力ある文化的雰囲気が漂よう都市をめざして、コンパルホール、歴史資料館、グリーンカルチャーセンター等の建設や府内城の堀浄化作戦、ケーブルの地下埋設・キャブシステムの導入、彫刻のあるまちづくり、大分の四季をテーマにした写真コンテストの実施等文化的視点に立ったまちづくりを積極的に推進している。

さらに、今後の本市における文化面の象徴となるべき施設の建設または建設構想を現在進めているところである。その一つは、裏川公園和風庭園内に建設中の能楽堂である。公立の能楽堂としては九州では二番目、全国でも五番目のもので、能楽ばかりでなく民踊、小唄、尺八、詩吟、寄席など日常的に接する機会の少ない古典芸能に触れる専用の場として一般に開放することにしており、これにより、日本の伝統文化に対する理解をいっそう深めていただけるものと確信しているところである。

もう一つは、市立美術館の建設である。本市は福田平八郎画伯や高山辰雄画伯それに人間国宝生野祥雲斉先生など多くの偉大な芸術家を輩出し、日本文化に大いに貢献してきていることは、ご承知のとおりである。しかし、これら先人の作品を含め優れた芸術を鑑賞する機会に乏しいことから、市民の間に美術館建設の要望が高まり、この芸術文化への関心と市民文化の向上に資することのできる美術館の建設に向け、昨年8月、その構想確立のために「大分市美術館基本構想委員会」を設置した。この委員会の委員長に本市の名誉市民でもある高山画伯を迎え、メンバーに彫刻家の富永直樹先生をはじめ、学識経験者として全国から著名な専門家に加わっていただいている。委員会からの21世紀を展望した美術館基本構想の提言を受け、本市の文化的特色を踏まえ本市にふさわしい美術館建設をめざしていく考えであり、この美術館が市民にとって偉大な芸術作品との対話の場、うるおいとやすらぎ、また文化的、知的創造の場となり得るものと大いに期待しているところである。

以上のように、本市においては文化施設をはじめとする文化環境の整備、文化活動の機会づくり等に積極的に取り組んでいるが、県民文化の担い手はあくまで県民一人ひとりであり、その集積の組織である県芸術文化振興会議の皆さんが、今後とも自主的、創造的に文化活動を展開されるようご期待申しあげるとともに「文化の香り高い豊の国づくり」に向け、さらに活躍されんことを祈念してやまない。



大分市能楽堂完成予想図

# 特別企画　芸振、25周年を迎えて

芸振会議は、県下の文化関係者が大同団結し、本県の芸術文化の発展に力を入れていこうと、東京オリンピックが開かれた昭和39年に発足した。そして、幾多の紆余曲折を経ながらも、昭和の高度経済成長とともに、押なべて順調に発展してきたと言える。

この四半世紀の間に、芸振会議会長もすでに四代である。この25年の足跡を、機関紙「芸振」の記事の中からピックアップしてまとめて見た。

## 初代　佐藤（さとう）　義詮（よしあき）氏

［昭和39年12月16日～昭和45年5月30日］

39．12．16　芸振会議が発足。事務局を県社会教育課に置く。
40．10．9　第1回大分県芸術祭記念音楽会を別府市で開催。
41．11．12　松方コレクション展が開かれる（大分文化会館）。
42．6．19　大分県立美術博物館建設期成会を結成。
42．10　第3回大分県芸術祭で「大分県芸術祭の歌」を発表。

## 二代　米田（よねだ）　貞一（ていいち）氏

［昭和45年6月1日～昭和51年6月23日］

45．8　機関紙「芸振」を創刊。
45．7．1　県費補助金20万円が芸振会議に交付される。
46．4．1　文化室が発足。
46．6．8　芸振会議の代表が文化室の設置を契機に「産業と文化併進の政治」の推進を知事や県議会議長、県教委へ陳情。
47．3　「文化年鑑」を創刊。
47．9　文化行政のいっそうの推進についての陳情書を知事、副知事、総務部長に提出
48．7．3　市町村単位及び地域における文化団体事務局長研修会を大分市で開催。
51．5．29　芸術会館起工式。

## 三代　辻（つじ）　英武（ひでたけ）氏

［昭和51年6月24日～昭和53年6月21日］

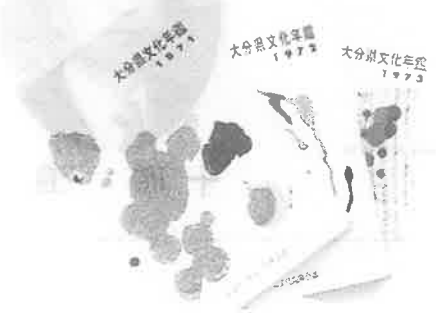
52．9．25　芸術会館開館。
52．12．22　芸振理事会で、文化基金構想を発表。
53．6．15　芸振理事会で、文化基金の先進県の調査結果を報告。文化基金の条例化で意見交換。

## 四代　挾間（はさま）　正年（まさとし）氏

［昭和53年6月22日～］

53．6．22　芸振総会で、文化基金の趣旨、事業内容、基金計画などが提案。
54．6．26　文化基金条例案が、県教委で承認。
54．7　第2回定例県議会で、大分県芸術文化基金条例成立。
54．8．1　第3回全国高等学校総合文化祭が本県で開催（～8／7）。
54．10．31　文化基金設立発起人会を開催。文化基金促進協力会が発足。
54．11．3　芸振会長、理事、促進協力会メンバーが大分市で第1回の街頭募金を行う。
56．3　「文化年鑑」通巻10号刊行。機関紙「芸振」通巻50号刊行。
58．2．5　高山辰雄先生文化勲章受章記念祝賀会。
59．10．1　大分県芸術祭20周年記念式典挙行。
60．1　平松知事、文化創造元年の提唱。
60．5．28　芸振総会、基金事業の諸規程を決定。また、3人の常任理事を選出。
60．6．3　芸振理事、平松知事と懇談。
60．6．26　文化基金促進協力会総会。21世紀豊の国文化創造懇話会設置。
60．7．15　文化基金事業がスタート（学校巡回公演 真玉小―コールレティッヒ）。
62．7．10　62．6．18の総会で決議した芸術文化振興についての要望書を知事に提出。
62．9．29　豊の国文化創造県民会議が発足。
62．12．17　理事会で、芸振シンボルマークを決定。
63．8．26　文化基金事業の海外派遣者座談会を開催。

# 『文化年鑑』創刊の思い出



## ―同心円から広がる地域文化を―

平野 昭彦

発足して25年、早いものだと思う。

本県に文化課が誕生したのは、昭和46年４月であった。当時は文化室と呼び、職員は６名であった。室長は田村先生、私は主幹という顔ぶれであった。文化振興も文化財保護もすべて担当していた。文化財保護でも思い出が多いが、文化振興では、現在も継続発刊されている「大分県文化年鑑」創刊号の発刊に携ったことである。これは、私の生涯で忘れられない人生ビデオである。

昭和39年に県芸術文化振興会議が結成され、翌年から県教委と合同新聞社との共催で大分県芸術祭が開催されてきたが、文化室が発足した頃は、すでに７回の実績を重ねていた。

ところが、そうした各部門の活動状況や組織運営などの記録がまとまった形では全くといっていいほど残されていなかった。そのため、他部門については、およそ関係がないといった傾向があり、文化活動の横の統一は殆どみられなかった。そこで、本県文化活動の実状を一貫して知ることができ、県民文化創造の連帯を強めるために、「大分県文化年鑑」をまとめ、年度ごとの記録を残していくことが企画された。年鑑の編集は、事務局長の田村室長、次長の菅久先生、北村宏通先生、それに文化室職員があたった。当時、幅広い文化活動の部門を統合することは、事務的にも精神的にも大変困難な作業であった。特に、理系出身の私には、ジャンルの決定、執筆者の選定、原稿の依頼、スタイル、サイズの決定など心を痛めることが多かった。しかし、多くの方々の親身な指導をいただいて、やっと完成した時の感激は忘れられない。

いま、「文化年鑑」は軌道に乗って、年度ごとに立派な記録がまとめられている。きっと原稿もスムーズに集まっていることと思う。

今回、年鑑の目次を創刊号から目を通して見た。それだけでも、本県芸術文化活動の変遷を知ることができた。戦後、あれだけ活発であった「青年演劇」が昭和54年版から姿を消していた。代りに「作曲・合唱」が現われていた。丁度、高度成長がピークに達した時である。ここにも社会的時代の影響が色濃く影を落しているのかとつくづく感じさせられた。

芸術文化の面では、本県は歴史的に優れた文人、芸術家が輩出している。ローカル文化が閉鎖的になるのではなく、常に外円との広がりの接点において、同心円的な性格をもって広がっていくことが、これからの県民文化の創造のカギになるのではないかと思う。

〔カットは、文化年鑑１号、２号、３号〕（芸振会員・元文化課主幹）

# これからの芸振に思う

## 「真の文化創造」スタートの年に……

十時　良

合同新聞１月元旦の論説で、〝ものも豊か心も豊かな豊の国づくりを目指す県政にとって「心」の面の「文化創造」が大きな比重を占める年になろう。特に、今秋、「豊の国文化創造県民会議」が21世紀を展望した文化行政について「本報告」を提出する。それを踏まえて、ひとつのスタートが切られる年といえよう……〟とのべている。〝芸振〟が発足して25周年を迎える今、県民にとって文化行政は強い関心のマトである。

振り返ってみると、昭和39年に生まれた芸振も初めは県内の各文化団体の連絡機関的な役割が中心で、秋に開かれる県芸術祭の事務局的な仕事をしていたに過ぎない。しかしその後、文化課が新設されるとともに、芸術祭の企画だけでなく、年間を通した活動組織体として充実され、県民文化の向上と発展に、大きな役割を果してきた。

特に昭和54年度から６年間をかけて３億円（県費１億５千万・寄付１億５千万）を積み立て、その利息によって60年度から、文化基金事業が始まり、芸術鑑賞事業・地域文化活動促進事業・芸術文化団体補助事業・海外派遣補助事業など、芸振が事業体としての役割を持つようになったことは、大分県の文化行政として大きな飛躍であった。

しかし、基金事業も５年目を迎えて、やっと軌道に乗りかけたかに見えるが、10年前の構想時に比べると、基金価値も下がり、とりたてて、「県民の芸術文化事業費」と言えるほどのものではなくなってきていることは事実である。……この辺にこれから先の、ひとつの問題点がありそうだ。

また、機関紙芸振74号（63年10月発行）で、かつて芸振事務局長であった田村卓夫先生が言われているように、「オフィシャルな感覚で芸振にかかわるようでは芸振の事務局はつとまらない」……とある。芸振の持つ役割や性格も、これから大いに検討されなければならない。芸術文化を育てることは、行事をうまく終わらせるだけでは済されない幅広い助成の「心」が必要である。〝芸振〟という組織も、各文化団体の役員レベルでは認識されているが、それぞれの会の会員の中にまでは、まだまだの感が強い。まして芸術文化に直接関係していない県民にとっては、ゲイシンは遠い存在のような気がする。

県民文化の質を高め、底辺を広げる具体的な役割を負うのが芸振とするならば、平成元年を機に「豊の国文化創造」の再スタートが切られることになれば、今年は非常に意義ある年になるであろう。

25周年から30周年に向って、それこそ、オフィシャルでない芸振のあり方が真剣に問われる時期がやってきたのではないだろうか……。

〔イラストは、筆者〕（芸振・事務局次長）

雪のボリショイ劇場前にて

# 本場ロシア・バレエを訪ねて

## —海外研修を終えて—

県洋舞踊協会長 佐藤 朱音

クラシック・バレエの伝統を誇る国ソ連。私は長い間、ロシア・バレエにあこがれていた。私事になってしまうが、私のバレエの恩師が、エリアナ・パヴロワに師事していた竹内　永先生（大分）、オリガ・サファイアの愛弟子 松山樹子先生〔(財)松山バレエ団〕で、いずれもロシア・バレエ出身の舞姫に、直接教えを受けられた方々であるがためである。私がバレエを習い始めたのが3歳の頃であったから、日本にバレエが上陸して、まだ長い時間は経っていなかったわけだし、ボリショイ・バレエの日本公演を観るまで、外国人による本舞台を鑑賞すること等全く無かった。

初来日のボリショイ・バレエ団入場券獲得に、連日、新宿コマ劇場に坐り込んだこと、また、モイセーエフ民俗舞踊団のあの不思議なエネルギーにとりつかれた若い頃の日々、考えてみれば私のバレエも、ロシア・バレエに知らず知らずのうちに大きな影響を受けていたに違いない。

そのあこがれのソ連を訪ねる機会を芸振会議から与えられ、感謝と責任感で胸が一杯になった。

短期間だが、ロシア冬芸術祭のために、ソ連の主な劇場、その劇場でのバレエ鑑賞が数多くできたことは何はともあれ幸運であった。

また、250年の歴史を誇るレニングラードバレエ学校を訪問したが、これもまた偶然と言うのか、日本人による校内見学（博物館・バレエ授業風景）を許されたのは、今回、私達が初めてであった。そこでは、バレエ界の神話の人ニジンスキーの衣裳、アンナ・パヴロウ愛用のトウシューズ、衣裳等手に取って見ることができたのも、私達バレエをする者にとっては、大きな感激であった。

ソ連の地で、初めて知ったことに、バレエ大学院（ギティス・バレエ教授学校）があったこと、そして、そこの教授と知り合えたこと。条件が整えばソ連バレエ界のトップである教授が、日本に足を運んで教えても良いと言って下さったことなど、出発前には思いもしないことが次々とあらわれ、耳を疑うほどであった。

モスクワにあるダンチェンコ劇場では、バレエ鑑賞とは別に、クラシック・バレエの基礎を受講できたが「イチ、ニイ、サン、シイ、ダーメダメ!!」と片言の日本語で指導に当たられる先生の親切さに、今度お会いする折は、ロシア語の単語位並べなくては……と心でつぶやきながら凍りついた雪の道を毎日通えたことは、今思えば本当に幸せなことであった。

大分県はまだなのだが、日本の各地ではすでにソ連のバレエ界との交流があり、若い人達が研鑽を積んでいる。これを機会に、是非本場の先生との交流が容易にできるよう努力しなければ……とも考えている。

今回の旅行で、本場バレエの素晴しさを肌で感じることができたことと、出発は昭和、帰国は平成と元号が変わったことで、終生忘れることができない研修旅行となったことである。

ソ連を訪ねることによって、私自身は、大きな課題を背負ってしまった。しかし、この機会を与えて下さった関係の方々に心から感謝している。

（芸振・監事）

さざ波

# 郷土芸能に思う

矢部　　効

熊本市民会館大ホールの広い舞台を、所狭しと荒れ狂っていた大蛇が、須佐之男命に退治されて長々と横たわった。クライマックスの歓喜の舞は、胸にじーんと込み上げるものがあり、目がしらが熱くなりかすんで見えた。

演目の内容は、伝説として有名な「おろち退治」をもとにしている。従って、ストーリーは誰もが知っており、親しみやすかったであろう。演技については、静と動、優雅と勇壮、喜怒哀楽などがよく表れていたと思う。何はともあれ、約15分間にまとめあげたこと、いつもより格段と広い舞台を活用したこと、これらのアレンジから示唆を得たのは大きな収穫であった。

以上は、昨年８月初旬に開かれた第12回全国高等学校総合文化祭（熊本大会）で、郷土芸能部門に本県から参加した県立碩南高等学校の「庄内神楽」を見ての感想である。

ところで、県内各地にはいろいろな郷土芸能がある。大分県高等学校文化連盟のメイン行事である総合文化祭においても、地域社会の援助、協力をいただいて、地元高校生の郷土芸能が大会を盛り上げる一翼を担っている。本年度の第13回日田大会では、「もちつき踊り」(玖珠農高)、「団七踊り」（昭和女子高、日田林工高）が上演され、熱意あふれる演技で好評を博した。これも皆さんのお陰と、関係各位にひたすら感謝している。

特定の地域で生まれ、歴史や風土に育てられた郷土芸能は、安寧や繁栄など善事を願ってのものであり、地域文化としてしっかり根づいている。時代が変わった今では、むしろ民俗芸能といった方がふさわしいかもしれない。どちらにしても、わが国は世界的な宝庫といわれる。このような文化遺産を大切にするためにも、高等学校総合文化祭の郷土芸能に深い意味合いを感じる。

12回全国高文祭、碩南高校による「庄内神楽」（Ｓ63.8.3）

今後の郷土芸能の振興を願って

(1)　あらゆる方法（機器、文献、口述等）による完全保存につとめる。

(2)　時間制限に対応できるよう、内容の整備や複数演技の合併が望まれる。

(3)　国際化時代を迎え、諸外国との交流ができるように心掛ける。

(4)　新しい郷土芸能を創造する。

夢物語もこの辺で幕をおろさせていただく。

（芸振副会長・県高文連会長）

## 加盟団体の活動

# 俳句結社『蕗』

倉田　紘文

長い昭和の時代が終わり、新しく平成の時代が流れ始めた。ご崩御という悲しみにつつまれながらも、時は確実に移ってゆくのである。小俳誌「蕗」もその時の流れの中で18年目を迎えた。昭和47年１月に創刊してから、通巻で205号を重ねている。当初500人で出発した「蕗」も今では全国に72支部、2,000人を越える結社となった。

「蕗」の活動で一番大きいのは毎年催される夏行俳句全国大会である。昨年は200号の記念も兼ねて静岡県清水市の三保ノ松原で、全国から200余名の参加者で盛会裡に行われた。今年は７月に宮崎県の青島で行う。

県内での活動は30の支部（連合機関誌「蕗叢」発行）が各地で月例句会を催して研修し、年４回の地区大会を持っている。２月／本部ミステリー吟行会　５月／久大線地区大会　６月／県南俳句大会　９月／豊肥線地区大会　12月／県北（宇佐）大会である。

昭年は『大分の伝統料理』（大分合同新聞社刊）に俳句を添え、末広小華書道展に協賛して作品を提供。今年、東京四季出版『俳句四季』５月号は「蕗」の特集号となる。また４月のＮＨＫ学園俳句大会（福岡市、湯布院町の２会場）の選者に紘文主宰が決定している。

〔カットは、機関誌「蕗」〕　（蕗主宰）

---

新シリーズ⑥
会員通信

## わたしは、今

# 郷土と文化に学ぶ

大分市民劇場代表　尾登　一信

山梨県立美術館にて

昨年３月、最後に近い青函連絡船に名残りを惜しもうと、フルムーンで出かけた。

函館も、青森も雪で、雪の棟方志功館で、開館を待ちながら、雪かきの手伝いをした。棟方志功の奔放な大壁画の中に、溢れる郷土愛を身にしみる思いで胸に納めて来た。

東京で１日暇ができたので、甲府まで足を伸し、山梨県立美術館を訪ねてみた。

広すぎる程広い敷地、その中に調和した野外彫刻と、館内の展示もゆったりとして、静かな森の中にいる感じ。有名なミレーの部屋は〝種子を播く人〟を中心に、油画、デッサンを含めて二十数点!!　一体どのくらいお金をかけたのだろうと、ただただ圧倒される思いであった。

帰りのタクシーの中で、まだ興奮のさめやらぬ私たちの疑問に、運転手が、こともなげに、「知事さんがどこかにかくしてあったんでしょう」と、親しみをこめて話してくれた。何か、大分県にはない深い文化の湖を見せつけられたような気になったのは、私たちだけだったのであろうか……。

市民劇場千人の会員獲得に骨身を削っている今日このごろである。

（元文化課長・芸振事務局長）

# 165人が一堂に

## ═「文化を語る夕べ」開かれる═

第３回文化を語る夕べを、昨年12月17日、県市町村会館で開催。

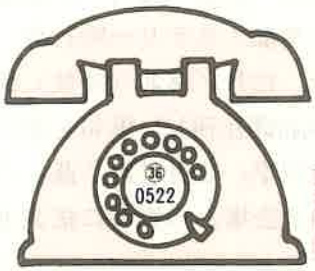
今回の夕べには、これまでと同様、来ひんとして平松知事をはじめ嶋津県教育長らが出席。芸振25周年にふさわしい意義ある夕べとなった。会は、中沢とおる常任理事の司会でスムーズに進行。今回の部門別代表５分間スピーチは、次のとおり。

文芸―佐々木均太郎氏、美術―菅久氏、
音楽―山本勝彦氏、舞踊―花柳笹之丞氏、
演劇―末田英三氏

大分県芸術文化振興会議

## シンボルマークの旗完成

昭和62年度に制定した芸振のシンボルマーク白地にえび茶で染抜いた芸振旗がこのほどでき上がった。芸振会議の躍進を願って、いろいろな場でこのペナントを掲示していきたい。




# 事務局だより

## 文化基金に100万円寄付

大分交響楽団理事長山本恭正氏（56歳）は、去る１月17日、県芸術文化基金に 100万円の寄付を行った。

今回の寄付は、同氏が、常々県の芸術文化に何か役立ちたいと考えていたのと、昨年の第24回県芸術祭特別感謝状の受賞がきっかけになって行われたものである。

なお、同基金に対する寄付は、昭和59年の基金完成後、初めてのものである。

（写真は寄付目録贈呈式。左側が山本氏）

## 基金運営協議会開催

昭和63年度基金運営協議会が、去る２月17日大分市で開催された。

この協議会は、平成元年度の基金事業の方向を決めるもので、元年度事業の概要説明の後、文化キャラバンや学校巡回の公演回数の増加など諮問どおりの答申が行われた。

## 地域文化連絡会

### 竹田市で開催

昭和63年度の地域文化連絡会は、前年度の杵築市に続き、竹田市の勤労青少年ホームで開催。地元竹田市をはじめ竹田教育事務所管内12の市町村からこれまでにない多数の関係者の参加を得て、活発な意見交換が行われた。

この会議に、出来上がった芸振旗を早速持参し、お披露目を行った。

地域文化連絡会であいさつする挾間会長